

## エゴイズムとエゴセントリズム

——自我没却の方法に関する一考察——

### 目次

- はじめに
- 一、原典における自我没却の原理
  - 二、『概説』における自我没却の原理
  - 三、社会教育の現場における感情・欲求の肯定論
  - 四、自我没却の原理の概念的整理の試み
  - 五、自我没却の方法としての自己中心性の克服について

### はじめに

広池千九郎は、『道徳科学の論文』（初版昭和三年、以下「論文」と略す）において、聖人（ソクラテス、キリスト、釈迦、孔子）の事跡や教説・教訓に一貫する道徳を最高道徳として体系的に提示したが、自我没却の原理は、その最初の原理として、極めて重要な意義をもつ。広池千九郎は、自我没却という場合の「自我」の説明として、英語の「エゴイズム」という言葉をあてている。しかし人間におけるエゴイズムの克服という意味での自我没却の原理も、半世紀の時間の経過の中でかなり変ほうを遂げている。

岩佐信道

また、最近のモラロジーによる社会教育においては、自我没却の原理が実践面で往々にして消極的、自己否定的に受け止められる傾向を是正する必要からか、自然な欲望や感情を抑圧することなく、ありのままに受容し、発現させることを重視する傾向も見受けられる。しかし、広池千九郎によって提出された自己保存の本能の原理や自我没却の原理は、ただ個人の心理的不適応への処方せんにとどまるものではなく、現代文明を根底から批判する原理であり、それを救済する原理であったはずである。

そこで本稿では、『論文』や『新科学モラロジー及び最高道德の特質』（初版昭和五年、以下「特質」と略す）などの広池千九郎自身の書いた著作と、現在、社会教育の講座のテキストとして用いられている『モラロジー概説』（昭和五十七年、以下「概説」と略す）における自我没却の原理を構造的に比較しながら、自我没却の原理の構造的な問題に考察を加えるとともに、自我没却の方法に関して、自己中心性（エゴセントリズム）の観点から、若干の考察を試みようとするものである。

## 一、原典における自我没却の原理

最高道德における自我没却とは、人間の不完全な精神作用を取り去り、そのかわりに神の心に一致する慈悲心を培うことであり、最高道德を実行しようとする場合、最初の課題である。『特質』では、第一〇章が「自我没却の原理」に充てられ、その初めに、

自我 (Egoism) とは、人間の自己保存の本能の事であります。この本能が人間の精神の中に存在しておいて、それが利己的に働いておつては最高道德がその人の精神に入り込むことができぬのであります。そこでこの本能を取り去ることが最高道德を實行する基礎になるのであります。(一六三頁)

と、自我没却の意味を明確に示している。ここで注目すべきことは、自我という言葉が、通常これに対応する英語の ego でなく、selfishness とほぼ同義の egoism の意味で使われており、利己主義とか利己心を意味していることである。そして、そのような意味での自我の本質が、人間の自己保存の本能であることによって、それが、生物としての人間に生得的、根源的に備わっているものとしてとらえていることである。

次に、この自我没却ということが最高道德実行の基礎であり、最高道德の入門であることは、『論文』の次のような表現でも確認することができる。

人間の精神内に自我というものがあれば、真の慈悲の心は出来ぬのであります。それ故に自我を棄つるのみでは消極的であれど、これを棄てざれば真の慈悲の心は出来ぬのであります。さればまず自我を棄ててはじめて伝統及び準伝統（注―各人にとって根本的な恩人の諸系列）に対する絶対服従の心が起り、かくて何事にも自己反省をするようになれば、不完全ながら最高道德の門に入ったものといふことができましょう。

（新版の七七頁）

ところで、この自我の本質に関する広池千九郎の説明には、用語上の混乱が見られる。すなわち、上に引用した「特質」の第一〇章の冒頭では、「自我とは人間の自己保存の本能のこと」とされているのであるが、その三年後に書かれた『論文』の第二版（昭和九年）の自序文においては、自我は、自己保存の本能ではなく、利己的本能とされている。すなわち、「人間の自己保存の本能は、たえずその境域を越えて利己的本能に進み……」（新版①一〇頁）と述べた上で、自我没却の原理の説明の箇所が、「ここに自我 (Egoism) と申すは、利己的本能 (selfish instinct) のことではありません」（①三〇頁）としている。そして続けて「元来、人間は自己保存の本能 (instinct of self-preservation) を有しておるので、この本能は人間生活の必要機能にして、これは道德でもないが、同時

に不道徳でもないのです。たとえば一日に肉三斤を食すれば生きておられる人が、それだけ食するは害なけれど、その人がもし肉四斤をむきばり食する時には、その剰余の一斤は利己的本能の発露であります」(同頁)と述べている。

このような混乱は、たとえ理論上、自己保存の本能と利己的本能とを明確に区別することができたとしても、實際上、その境界は明りようではなく、極めて主観的なものであるために、場合によって、自我すなわち利己心を自己保存の本能としたり、利己的本能としたりする混乱が生じたと考えられることができるであろう。しかし、上のような簡明なたとえで自己保存の本能と利己的本能の区別をしているところからしても、より晩年(昭和八、九年ごろ)の広池千九郎にとって、自我の主たる内容は利己的本能であったと考えるのが適当であろう。ちなみに、自我没却の構造的な説明として、古い「最高道徳の概覧表」には、

- ① 自己保存の本能の浄化
- ② 利己的本能の解脱
- ③ 道徳的本能の進化

の三つがあげられているが、この場合でも、自我没却の中心となるのは、利己的本能の解脱であると考えることができよう。

ところで、以上のように、自我没却の原理における自我(egoism)とは、自己保存の本能もしくは利己的本能のことであることから、広池千九郎は、『論文』や『特質』において、かなりのスペースを費やして本能を論じている。たとえば『特質』の第七章上、「自己保存の本能の原理」には、三八頁が、そして、人間の利己的本能によってすべての問題を解決することはできないことを論じた第七章下には、一四頁が充てられ、合計五二頁が人間

の本能に関する論述に充てられている。ちなみに『特質』では、最高道徳の各原理のうち、人心開発・救済の原理に三四頁、神の原理に二十頁、伝統の原理に一八頁、自我没却の原理と義務先行の原理にそれぞれ一六頁が充てられていることと対比しても、その重要性がうかがわれる。結局、『特質』は、その第七章において、現代文明の根底に人間の利己的本能が横たわっており、この本能に対する根本的な解決なくしては、現代世界の諸問題の根本的解決は不可能であることを示し、これを受けて、第一〇章の「自我没却の原理」において、個人のレベルで利己的本能を取り去ることによって、この問題に対する根本的解決を提示しようとしたものと考えることができよう。

## 二、『概説』における自我没却の原理

『特質』から約五十年後に出版された『概説』は、その間のそれぞれの学問分野の推移とその成果を反映している。広池千九郎は、『特質』において極めて重要な位置を占めている本能論の学問的根拠を W. McDougall の *An Introduction to Social Psychology* や C. A. Ellwood の *Sociology in its Psychological Aspects* など求めた。しかしその後、人間における本能の議論は下火となり、それに代わって欲求論が盛んになった。ただし、Ronald Fletcher などは *Instinct in Man* (『人間の本能』一九六六年) を著し、「本能という概念は死滅したと広く宣言されたが、そのような見解は、真実に反し、そうした議論は混乱し、情報不足で、独断に満ちている」と訴えている。(二頁)

そのため、『概説』においては、人間の自己保存の本能についての論述は、四頁目に「広池千九郎によれば、普通道徳の本質は、人間の自己保存の本能にあり、最高道徳の本質は、諸聖人が示した万物を生成化育する慈悲の

心にあるとしています」と述べるにとどまり、利己的本能に関する記述は全く姿を消している。次に、人間の本性を論じた『概説』の第四章では、「人間の本性を論ずる場合には、古くは本能という概念が用いられましたが、今日では、欲求という概念が使われています」（四六頁）として、本能論に代えて、欲求理論が紹介されている。しかし、わずかに二頁ほどでなされている欲求の説明では、それが後述の自我没却の原理における利己心とどのような関係にあるかが必ずしも明りようとはいえない。さらに、『概説』の第五章の「人類社会の発展と道徳の進歩」においては、社会構成の要素は、本能、知識、道徳の三つであるとして、再び本能に言及がなされている。この社会構成の要素としての本能が、欲求や利己心と理論的にどのような関係にあるかを明らかにする必要があるであろう。このように、『概説』においては、自我の内容としての本能論を欲求論に置き換えた後の理論的整合性が今後に残された課題といえよう。

### 三、社会教育の現場における感情・欲求の肯定論

一方、社会教育の現場においては、従来の自我没却の原理の不適切な受け止め方によって、人々の、のびのびとした自然な活動が抑圧され、行動が縮してしまいう傾向がなきにしもあらずであるという認識があったといえる。たとえば、最高道徳の実行を心がけようとする者が、時に、他人の不正に怒りを覚えたり、自分の能力を自慢したり、自分の主張を頑固に押し通したり、悲嘆にくれたりするような心の動きも、自我の現れであると指摘されると、かえって、自分の自然な心の動きを抑制し、自己を否定的にとらえ、行動が消極的になってしまふ場合が見受けられる。こうした自我没却の原理の誤った受け止め方の弊害に対応してか、最近のモロロジの社会教育関係の出版物では、自我没却の原理を自己否定的に受け止めることなく、むしろ積極的な自己肯定の必要性が強調されてきているように思われる。

たとえば、「感じるから、生き生きする」というタイトルの『ニューモラル』の第二六八号（平成三年二月）を取り上げてみよう。そこには「感情に気づくと楽になる」という見出しで、次のようなことが書かれている。母親、陽子さんは、子どもたちに「もっときれいに食べなさい」、「早くかたづけなさい」と表情もとげとげしく、キツイ口調であたりちらしている自分に気がついた。その後、陽子さんは、夫の憲次さんと子育てについて話し合おうちに、自分の中に「子育ては、もうイヤだ、疲れた」という気持ちがあることに気づくようになったとして、陽子さんに次のように言わせている。

まさか、自分が「子育てがイヤだ」と感じてるなんて思ってもみなかった。だから、当時は、わけもなくイライラして、ほんとにつらかったの。でも、「イヤだ」という気持ちに気づいたら楽になったわ。ああ、イヤだと感じてたからイライラしてたんだな。って、抑えこんでいた感情に気づいたら楽になったの。イヤだ。って感じててもやらなきゃいけないこともあるけど、「イヤだ」とはつきり意識してやるほうが、かえって楽にできるの（二八―九頁）

と。そして次の「リラククスして感情に気づこう」の見出しのもとに、

自分の感情に気づかないでいると、いろいろな問題が出てきます。からだを緊張させて、力を入れているのですから、肩が凝ったり、背中が痛くなったりします。さらに、頭が痛くなったり、胃の調子が悪くなることもあります。

また抑えこまれている感情は、はけ口を求めて、無意識のうちに考え方や行動に影響を及ぼします。自分でも気づかないまま、なんでも悪いほうへ悪いほうへ考えるようになったり、イライラして落ち着かなくなったり、なんでも人に頼るようになったりします。……「怒ってはいけない」「泣いてはいけない」「がんばら

なくてはいけない」というような意志の力で抑えこんで、気づかなくなっている感情がないか、からだの中を感じてみましょう。(一九頁)

また、『れいろ』(平成三年九月)の「自己発見ツアー」という特集でも、極めて類似した内容が論じられている。すなわち、私たちの社会では、「腹が立つ」とか、「頭にくる」などの感情は押し殺して、表に出さないことが美德とされている。しかし、そういう押し殺した感情は、決してなくなってしまうのではなく、ただ私たちが、体を感じている感情に気づかなくなってしまうだけである。気づかないでいる感情は、体の中にたまってしまい、胃が痛くなったり、肩が凝ったり、頭痛がとれないなどの形で現れ、さらにはけ口を求めて、知らず知らず、ひとを責めたり、何でも悪いほうに考えたり、人に頼ったり、落ち着かずいららするということのようなことが起こる。したがってこのような感情を押し殺すのではなく、「自分の感情に気づく」ことが大切である、としている。

このように、人間の自然な感情や欲求が、厳しすぎる道徳観のゆえに、無意識のうちに抑えこまれ、そのために生じる精神的障害を治すために、抑えこまれていた感情や欲求に気づき、それを受容するという立場は、基本的に精神分析の立場に通じるといえよう。自我没却の原理の実践が、時に、人々を自己否定や自信喪失に導いてしまうことに配慮して、自己の感情や欲求を肯定し、自己肯定と自己実現を強調しようとする傾向は今日強くなっているように思われる。そして、それは意味のあることであろう。しかし、自我没却の原理と精神分析的感情肯定論の立場との異同を慎重に見極める必要がある。

#### 四、自我没却の原理の概念的整理の試み

以上のように、今日における自我没却の原理は、一方で、『概説』にみられる本能論放棄による概念的整合性の課題に直面し、他方で、社会教育の現場における自我没却論から自己感情肯定論への傾斜と、さまざまな問題に直面しているといえる。このような中において自我没却の方法を考察する場合、まず広池千九郎自身の著作において、自我没却の原理の根底にあった自己保存の本能や利己的本能の概念を、単に欲求論で置き換えることができるかどうかということが問題となる。

そこで、こうした問題に関連して、一つの私見を提出して、議論を喚起したい。その要点は次のようなものがある。

##### (一) 欲求論における迫力の欠如

広池千九郎は一貫して、現代文明を大局から批判する視点を堅持していた。そしてその根拠となったものが人間の自己保存の本能(及び利己的本能)の原理であり、そのインパクトないし破壊力は極めて大きいものがあつた。しかし、欲求論において、飢えや渇きを満たそうとする生理的欲求や、人から愛されたいという社会的欲求、さらに理想を追究し、価値を創造しようとする精神的欲求などがある、という説明からは、広池千九郎における利己的本能論をもってするような迫力は出てこないように思われる。少なくとも、この欲求論からは、その欲求が利己的に働きがちで、それを浄化しなければならないという議論さえ出てこないのである。いいかえれば、この欲求論は自我没却の原理において取り去られるべきものとされている利己心の十分な説明もしくは理論的根拠

を提供していないと考えられる。

(二) 本能論を堅持することも一つの立場である

人間における本能論が多くの批判を受け、下火になっていったとしても、それは決して死滅したわけではなく、フレッチャーのように、それを再構築しようとしている学者もあるのである。そもそも広池千九郎の本能論は、他の学者の本能論を引き合いに出して、本能という言葉を基礎づけているとはいえず、内容的に、自己保存の本能もしくは利己の本能という言葉によって意味したものは、他の学者の本能論とはかなり趣を異にしているといわざるをえない。したがって、通常の狭義の本能論が下火になったからといって、広池千九郎の自己保存の本能および利己の本能の理論が根拠を失うことにはならないともいえる。すなわち、行動主義的な狭い意味での人間行動の説明概念としては、本能という概念が不十分であるとしても、思想としての本能の概念は、十分に有効性をもちうるということもあるのではないであろうか。

問題は、他の経験科学における多数派によって、その基本的概念が受け入れられるかどうかではなく、その理論体系の中で、その概念がいかに合理性と説得力をもっているかであると思われる。モラロジーという壮大な理論体系において首尾一貫性があり、有効であるかぎり、他の狭い経験科学によってその概念が承認されるかどうかということは、決定的に重要なことではないとも考えられる。したがって、心理学において本能論が盛んでないからといって、モラロジーにおける本能論を取り下げる必要はなく、一層、モラロジーの中での整合性を高める努力をすればよいという考えも、一つの立場として可能であろう。

(三) 本能という言葉のもつ「狭い範囲の行動のパターン」というイメージ

しかし、本能という言葉は、動物に見られるような狭い範囲の、一定の生得的な行動のパターンというイメージを伴いがちであり、後天的な学習によって大きく影響されている人間の行動を、自己保存の本能や利己の本能の発現として説明することには、多少の無理があるようにも考えられる。特に、広池千九郎が利己の本能という言葉で意味しているものは、後天的に、社会の中で、他者との接触を通して獲得された部分が極めて多いように思われる。したがって、このようなものを、すべて本能という概念で包括することには、やはり理論的困難が伴うと考えられる。ここでは右の(二)の立場でなく、この立場で論を進めていく。

(四) 自己保存の本能は自己保存の本性、利己の本能は利己心として扱ってはどうか

広池千九郎は、すでに取り上げた「論文」の第二版自序文における文章のように、自己保存の本能と利己の本能とを明確に区別しているところもあるが、別の箇所では、両者を全く区別しないで用いている。たとえば、「本能は二つに分かるのであります。その一つは自己保存の本能すなわち利己の本能であって、その二つは道德的本能すなわち自己犠牲の本能であります」(新版⑦七八―九頁)というような表現も見られる。このように、同じ著述の中で明らかに矛盾する術語の用いかたは問題をはらんでおり、概念的な整理が必要であろう。

そこで、広池千九郎の、自己保存の本能と、利己の本能とで意味したものの間には、その文脈によって、さまざまな程度の重複があったのであるが、これを概念的に明確に区別して、第二版自序文における表現に従い、自己保存の本能は、人間の生存に必要な多分に生得的な働きで、道徳でも不道徳でもないものに限定し、自我没却の原理において、取り去るべき対象としての自我すなわちエゴイズムとは、利己の本能であるということにして

はどうであろうか。ただし、すでに述べたように、本能という言葉が、かなり狭い意味での生得的な行動のパターンというイメージが強いために、自己保存の本能は自己保存の本性と呼び、利己的本能という言葉で意味されたものは、後天的なものを多分に含んでいることもあり、本能という言葉を選挙して、ただ利己心と呼ぶことに決めるはどうであろうか。

自己保存の本能を自己保存の本性と呼ぶことに関しては、『特質』に、本能とは、「天性、本性、内部刺激などいうと同一」とあり、さらに「人間の肉体的および精神的な生活におけるその自己の保存、発達および満足を要求するところの人間固有の本性」(七九頁)とあることから、「本能」を「本性」と呼びかえることは、広池千九郎の本来の意図から大きく遠ざかるとは考えられない。『概説』においても、「本性」という言葉は多用されている。こうして、自己保存の本能の意味を、生物としての生存、発達を求めた本性で、道徳的な善悪を問う以前のものに範囲を限定して、自己保存の本性と呼ぶことにし、広池千九郎によって、自己保存の本能に関して展開された議論のかなりの部分を生かしてはどうであろうか。

次に、利己的本能を利己心と呼ぶことに関しては、広池千九郎が利己的本能と呼んだものは、決して後天的な学習を必要としない生得的なものというより、人間が社会を作り、その中で道徳規範を発達させて後に獲得されたものと考えざるをえないものであり、本能というより習性と考える方が適当と考えられるからである。すなわち、自己保存の本性をもった人間が、環境と接触し、経験を重ねることによって、心と行動にさまざまな習性が獲得されていく。そのうちのあるものは、自己保存の範囲を越えて、かえって他者や社会の利益に反する性質のものとなり、あるものは、基本的に他者の喜びや幸せを喜び、求める性質のものとなるであろう。前者は、習性としての利己心であり、後者は、道徳心といえよう。オオカミに育てられたアマラとカマラは、発見された時は、

そこには自己保存の本性とオオカミの習性があるのみで、人間らしい道徳性も、また人間に固有の利己的な行動も見られなかったのである。人間の利己的行動も道徳的行動も、ともに、人間の自己保存の本性を基盤にして、人間社会の中で学習されて習性となるものといえるのではなからうか。

(四) 利己心が習性であるとすれば、それは本能や本性より可変的と考えられる

広池千九郎によって利己的本能と呼ばれていたものが、本能でなく、後天的に獲得された習性であると考えることができるとすれば、それは、本能や本性よりも可変的なものということになる。本能や本性は、生物として生まれながらに備わっているものであり、その改変は極めて困難である。たとえば、ペットとして人間に飼われている犬は、訓練によって、その家族に対しては極めておとなしく、忠実に行動する習性を身につける。しかし、その犬が、散歩の途中にたまたまうさぎのような動物を見ると、主人の制止を振り切って、襲いかかることがある。これはまさに犬の本能もしくは本性と考えられるのであって、環境をコントロールすることによって、そのような本能的な行動の発現の機会を少なくすることはできるとしても、犬が潜在的にもっている本性をなくさせたり、変質させることは極めて困難なことといえるであろう。

人間の利己心は、このような本能的、本性的なものというより、経験を積み重ねる中で、習性となったものであり、その強さや働きぐあいは、人によって個人差があると考えられる。したがって、それは環境や教育によって変化の可能なものと考えることができると同時に、人間の利己心の強弱、盛衰に対する環境の影響と、本人の責任を一層大きくクローズアップさせることになるのである。

## 五、自我没却の方法としての自己中心性の克服について

### (一) 自我すなわち利己心の発現における認知的要素

以上見てきたように、自我すなわちエゴイズムを、本能という言葉を用いないで、利己心と呼び、生存に必要な機能としての生得的な心身の働きを自己保存の本性と呼ぶことにして、以下の論を進めていく。自我を利己心と呼ぶことについては、すでに『概説』もそうしているところである。

まず、人間の食欲を例にとつて、それにまつわる利己心の表れについて考察を進めてみよう。食欲は、生物が自己を肉体的に保存するための最も基本的な欲求である。生まれたばかりの何もわからない赤ちゃんでも、母親の乳首からおっぱいを吸うことはできる。その能力なくして、赤ちゃんの生存は保証されないのである。この食欲を満たすために食物をとる行動は、一日も欠かすことなく、死ぬまで繰り返される。

しかし、その行動は、動物とは基本的に異なる。動物がものを食べる場合、それは全く自然の行動であり、その食べかたが見苦しいとか、他に迷惑をかけているかどうかなどということは問題にならない。しかし、人間の場合には、食物の採取、貯蔵、料理などに関してさまざまな技術があり、食べる場合にも、何人かの人々と共に、ある種の食事のマナーに従って食べるのが普通である。従って、人間の食欲を満たす行動は、初めから、人間社会の文化や慣習、マナーなどによって大きく色づけされた行動なのであって、素朴な本能的な行動などというのはありえないことができる。

こうして、文化によって極めて大きく色づけされた飲食行動に関して、エゴイズムの表れと考えられるであろう行動について考えてみよう。すでに触れた「一日に肉三斤を食すれば生きておられる人が、もし四斤をむさばり食する場合には、その剰余の一斤は利己的本能の発露」であるとの『論文』の表現のように、食べすぎや飲みすぎは、利己心の発露と考えることができる。しかし、どの程度肉を食べると食べすぎになるか、どの程度アルコールを飲むと飲みすぎになるかは、必ずしも、体が自然にわかまえていたものではない。そこにある程度の知的な働きが介在してそれがわかるといえるであらう。

また同じ皿に盛りつけてあるものを何人かで食べる場合、先に手をつけた人が食欲にまかせて、欲しいだけ取ってしまったら、後の人には食べ物が残らないことになり、そのような行動は、極めて利己的な行動ということになろう。したがってこのような場合に、適切な行動をとるということは、その料理を何人が食べるのかという状況に関する確な判断に基づいて行動することであつて、利己的な行動とは、そのような知的判断が存在しなかつたか、不十分であつたか、または存在してもそれが行動に影響を及ぼさなかつたということを意味しているのである。

このような例は、人間の自我すなわちエゴイズムの表れとしては特殊な事例にすぎないと考えられるかもしれない。しかし、社会生活をしている人間の行動に、本能的なものがそのまま表出することこそ極めてまれなのであつて、多くの場合、そこには、問題状況の認識や目標の設定や方法の選択などのあらゆる局面で、極めて知的な作用が介入しているのである。従つて、人間の自我の表れと考えられるような行動は、その人における種の知的作用の不十分さを物語るものであるといえるであらう。たとえば、『概説』では、「モラロジーという自我は、他人や社会の利害を顧みないで、自分の欲求を満足させようとする自分中心の利己的な心づかいのことです」(二〇〇頁)と説明している。この「他人や社会の利害を顧みないで」という語句が挿入されているところに、自我が、ある種の知的作用の不在もしくは不十分さを伴うものであることを物語っている。



『概説』では、さらに続けて

この自我は、仏教でいう煩惱にあたります。煩惱とは、いわゆる貪、瞋、痴などをさします。貪とは物や名誉などを際限なく欲しがる心、瞋とは憎しみ怒る心、痴とはものの道理をわきまえないで迷う心のこと、よこしまな考えや誤った執着心にとらわれて、真理に目が開かれていない状態をいいます。

また、私欲、情欲、ごう慢、強情、負け惜しみなどの精神作用は、自我のいちじるしい表れです。そのほか、他人の気持ちや立場を考えないで、自分かつてな言葉づかいや行動をするとか、失敗や失望のために極端にふさぎ込んでしまふとか、不平を唱えて憤慨するとか、形式的にむやみに謙そんするとか、虚栄心に富むとか、他人に必要以上に干渉して世話をやくとかすることは、すべて自我の表れです。(一〇一頁)

と述べている。ここに自我の表れとして列挙してあるものの中には、瞋とか情欲などのように、理性的なものを越えたところの、ある種の情動のほとばしりと考えられるようなものも見られる。しかし、そのような情動の発生そのものにしても、それは、ある状況についてのある種の認識の結果であり、また、その情動をどのように処理し、どのような行動をとるかということにも、ある種の知的な要素が介入しているのである。

たとえば、ある人が、相手が自分を侮辱し、ば声を浴びせたことに逆上し、我を忘れて相手をなぐりつけた、という場合を考えてみよう。この場合、確かに自分の怒りが相手への暴力という形をとって表れることを抑制できなかつたという点では、理性が働いていなかったといえよう。しかし、相手の態度が自分を侮辱している認識できるということは、極めて高度な知的判断であり、また相手の発した言葉を聞き、相手をなぐりつけてしまふだけの怒りを覚えるということは、これまた高度な知的活動の結果なのである。

## (二) ピアジェの発達心理学におけるエゴセントリズム(自己中心性)

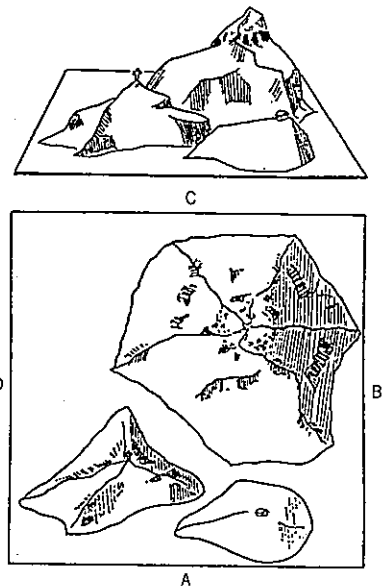
こうして、人間の自我すなわち利己心には、本来的に、知的な要素が含まれており、しかも、その知的要素のある意味での不十分さが問題になるということなのである。『概説』では、すでに引いたように、自我すなわち利己心とは、まさに、人間が自己保存の本性に基づいて、自己の欲求を満足させようとするに際して、「他人や社会の利害を顧みないで」、「自分中心」に行動する心づかいであるとしている。そこで、エゴイズムとエゴセントリズムとの関係を考えるにあたり、まず心理学における自己中心性の研究を参考にすることにしよう。

自己中心性 (egocentrism) とは、元来、ピアジェ心理学における極めて重要な概念の一つである。それは、人がものごとを認識する際、他にもさまざまな見方や立場があることに気づかず、ただ一つの立場—自分の立場—からしかものを見られない状態のことである。そして、自分の考えや行動がその自分の立場によって大きな制約を受けていることすら自覚していない状態を意味している。ピアジェは、自己中心性を子どももの認識における特徴として研究した。その極めてわかりやすい例を、「三つの山」の実験における子どもの反応に見てみよう。

ピアジェは、大きさや高さ、色、頂上にあるものなどが異なる三つの山が配置された模型を使って、子どもが自分の座っている場所からの見え方と、他の場所に座っている人形に見える見え方とをどのように区別できるかを調べる実験を行った。詳しくは、手前右手に頂上に小屋のある低い緑の山があり、少し奥の左手に、頂上に十字架のある中くらいの高さの茶色い山があり、その二つの山の奥やや右寄りところに頂上に雪をかぶった灰色の一番高い山がある。この模型を用いて子どもたちは、イ、三つの山のカードを与えられ、自分の位置からの見えかたや、別の位置に座っている人形からの見えかたに従ってカードを並べる。ロ、模型の前後左右さまざまな位置に座っている人形にとっての見え方を十枚の絵の中から選ぶ。ハ、一枚の絵をみて、それがどの位置から見た

ものかをいう、などの課題に取り組むのである。

こうした課題に対する子どもの反応は、年齢によってさまざまである。四、五歳の子どもには課題の意味が全く理解されない。六歳半の子どもは、自分の位置(A)からの山の見えかたに従って正しくカードを並べることができ、模型の向こう側(C)にいる人形に見える山の見えかたについても、自分の位置(A)から見えたものと同じようにカードを並べてしまう。そこで、実際に子どもを別の位置(B)に座らせると、カードを正しく並べることができ、元の位置(A)からの見えかたも思い出すことができる。しかし、子どもを(B)の位置



に座らせたままで、その反対側の(D)の位置からの見えかたを尋ねると、やはり(B)からの見えかたで並べてしまうのである。こうしたことから、このような年齢の子どもは、自分が経験した位置からの見えかたと、現在見ている山の見えかたが違うことは認め、それを思い出すこともできるが、現在の自分の位置から、まだ経験していない別の位置からの見え方を想像することは困難で、どうしても、現在の自分にとっての見え方に影響されてしまうのである。さらに、別の位置にいる人にどのように見えているかを、一枚の絵を選んで答える課題においても、自分の位置から見える見え方と同じ絵を選んで、たとえ違うことが理解できても、自分の位置からの見えかたに影響された絵を選んでしまうのである。

このような例に見られる自己中心性は、直観的思考もしくは前操作的思考と呼ばれる発達段階に見られるものであり、思考が知覚によって影響をうけることが一つの特徴である。たとえば、この年齢の子どもにもゴム粘土を与えて、同じ大きさの二つのボールを作らせるとしよう。次に、子どもの目の前で、一方のボールを押しつぶして、平たくし、「この二つのゴム粘土はどちらが多いでしょう」と尋ねると、子どもは、見かけ上の大きさに影響されて、「平たい方が多い」というのである。ところが、子どもたちの思考は、七、八歳ごろから次の段階へと徐々に移行していき、「二つのゴム粘土は、付け加えてもいないし、削ってもいないのだから、形を変えただけでは量は変わらない」と考えられるようになる。また「三つの山」の模型では、自分の視点と他者の視点と客観的に区別できるようになり、それらを統合することもできるようになる。このような論理的に首尾一貫した思考ができるようになる次の段階は具体的操作の段階と呼ばれる。したがって、発達心理学における自己中心性は、子どもの一時期における思考の特徴であるとともに、それは道徳的な善悪の価値判断のらち外にあるものということができる。

### (三) エゴイズムの根底にあるエゴセントリズム(自己中心性)

しかし、人間の具体的な行動を考える時、ものごとを、自分の限られた視野からとらえ、その結果として、行動が適切さを欠き、問題を生じるといふことは、年令を問わず、多くの人々にみられる。この点を明らかにするために、まず単純な子どもの場合から考えてみよう。

たとえば、ここにふたりの幼児がなかよく遊んでいて、おもしろいおもちゃを見つけたとしよう。すると、自分がそのおもちゃで遊ぼうとしておもちゃの奪いあいになり、おもちゃをとれなかった方は泣き出すことがある。

幼児の場合、そのおもしろそうなおもちゃで遊びたいという気持ちがあるだけで、それまで仲よくしていた相手も自分と同様にそのおもちゃで遊びたいと思っていることも、自分がそのおもちゃを奪えば、相手は悲しむであろうということにも思い及ばないのである。まして、時間を決めて交替でおもちゃを使うというような自他の利害の調節はできない。要するに、幼児においては、相手の気持ちを考慮できなことも、他の精神的機能も未発達であるがゆえに、そのおもちゃで遊びたいという気持ちが、そのまま行動に移されてしまい、力の強い子どもの方がおもちゃを取り、もう一方はべそをかくということが終わってしまうのである。

次に、さほどしつけの行き届いていない家庭で、誕生日のケーキを分けて食べる場合を考えてみよう。もし、子どもが何人もいる家庭では、ケーキの大きさにアンバランスがあつた場合、その大きいケーキをだれがとるかでささいな争いが生じるかもしれない。そのようにわずかなケーキの大きさの違いで言い争う子どもの念頭には、自分ができるだけ大きいケーキを食べたいという気持ちがあるのみであろう。その視野は、他の幼い兄弟を喜ばせてやろうというゆとりをもつた子どもや、せつかくの誕生日をみなで楽しく祝おうと願う親の視野と比べると、はるかに狭いと言わざるをえないであろう。

また、小学校や中学校で「いじめ」が問題になることがある。これも、いじめる側の子どもたちが、いじめを受ける子どもの気持ちをくみ取ることができないことに根本的な原因がある。いじめに積極的に加わらなくとも、消極的に自分をいじめる側におく子どもも多く、それは、いじめる側にはないと、次には、自分がいじめられる側になってしまうという恐怖感があるからともいわれる。いじめにしても、いじめの現象は、子どもたちがいじめられる子ども側の側に自分をおき、その気持ちを十分に考慮に入れた行動ができないところに問題があるのであつて、これも視野の狭さの問題ということができよう。

このように、子どもの事例で考えてみると、ものごとに対する視野の狭さは、人間の行動の幼さ、未熟さを示すものであり、人間関係における対立や争いの多くが、そのような視野の狭さに起因していることがよくわかる。しかし、ものごとを自分の立場だけから判断して、他者の立場を理解もしくは考慮できなかったり、ものごとをより広い視野から眺めることができないために、行動がちぐはぐになったり、不適切になったり、集団の調和を乱したりすることは、家庭内のいざこざから、生産者と消費者、資本家側と労働者などの利害集団の対立、人種、民族間の紛争など、大人の世界にこそ多く、もっと深刻な形で見られるのである。したがって、自己中心性という言葉を、思考の発達心理学における狭い意味での用法から広げて、人間が、自分の狭い視野から見た世界や事態を、あたかもそれがすべてであるかのように思いこみ、ものごとの全体を見ないで行動する傾向を指すものとして、広く用いることができるかすれば、そのような自己中心性こそ、人間の自我すなわち利己心の根底にあるものということができるとはなからうか。

広池千九郎は、『論文』において、慈悲の心のない自己本位の行動の例として、昔、汽車の中で、健康な者が、周囲の病者や弱者、老人などの事情を考慮せずに窓を開いて快をむさばることなどをあげている。また慈悲心のない者は、相手方や第三者の便利や幸福を考へることなく、ただ自己のこのみを考えて利己的判断をすること指摘し、その例として、親せきの者の来訪を受けて、もてなす側が、「いつまで宿泊してくださいますか」と尋ねると、来訪者はその質問の意図を利己的にそんで、早く帰宅をうながすなど邪推する、というような例をあげている。このような例は、まさに利己心が自己中心的な認識と思考に基づいていることの好例といえよう。結局、人間のエゴイズムとは、人間が、相手や他者の立場を考慮するとか、自分の立場を離れて、全体の状況を考慮して、「三方よし」を追及するといった視点が欠けていることと密接に関係しているということができると

ある。

物欲や所有欲ばかりでなく、自我 (egoism) の表れとされているさまざまな精神作用や行動も、人間がその狭い視野からものごとを見て、状況の全体が考慮されていないことに起因している場合が少なくない。怒りや憎しみは、他者の考えや行動を自分の狭い視野からとらえたための思い込みや誤解に基づいている場合が少なくない。もし相手の行動を、相手の立場にたつて理解しようとすれば、自分の受け止めかたの偏りにも気付き、問題に冷静に対処することができるであろう。さらに高慢やごう慢は、自分が一番えらいとか、力があるとか、さまざまな意味での能力があると思ひこんで、他の人を見下すところからくる人間の態度といえよう。そうした態度の人は、今日まで自分を育ててくれたさまざまな恩人が存在すること、自分がどのような立場にいようと、多くの人が今の自分を支えてくれていること、また上には上がること、などに思い至っていないのであって、自分の置かれている姿を広い視野からみつめることができないことを示しているのである。

さらに、最近世界の各地で起こっている民族間の対立や紛争は、当事者たちが、自分たちの立場だけを有利にしようとする視野の狭さが原因となつていっているといふことができる。対立した者同士の間で、一方が他方を一時押さえつけて有利な立場に立ったとしても、押さえつけられた側の憎しみや恨みは決して消えることはなく、押さえ付けが厳しければ厳しいほど、強い反発力が蓄積され、いつか爆発を起こす可能性がある。地上に真の平和を築こうと願う立場からすれば、そのような対立を解決するには、相手の立場を、自分たちの立場と同様に尊重し、共存の道をさぐる以外にないことになるのである。また経済的に恵まれた社会に生活する人々が、その大きい技術力や経済力をもって、地球上の限られた資源を、自らの快適な生活のために浪費したり、地上に飢えて死んでいく人々が多数いるのに、飽食の限りを尽くすことは、視野の狭い、自己中心的な行動と言われても仕方ないであらう。

このように見てくると、人間関係に対立や争いをもたらし、他を傷つけ苦しめるとともに、いずれ自己をも苦しめる人間の自我すなわちエゴイズムは、その根底において、人間の自己中心的な視野の狭さによるといえるであらう。したがって、このような利己的な心と行動の習性を取り除いていくには、まず、自分のものごとに対する見かたが偏つていことに気づき、こだわりを捨てて、人の言うことに耳を傾け、他者の立場に身をおき、物事を広く、全体的に見つめ、「三方よし」の実現を心がけることが必要となるのである。

#### ④ 自己中心性を克服し、視野を広げることによって見えてくるもの

視野を広げるといふことは、「三つの山」の実験でいえば、模型をながめる場所を、自分が最初に座ったA地点にこだわることなく、自分の左右のB地点やD地点、自分と正反対のC地点などに移してみたり、その模型全体が見渡せる高い場所に移していくことを意味する。さらに、模型全体ばかりでなく、それをさまざまな角度からながめている人々をも一度に見渡せるような高い場所に身を置けば、最初に自分のいたA地点が全体の中でどのような位置づけにあるかということも理解できるのである。

自分の考え方や行動は、知らず知らずに、自分の狭い見方や立場によって制約を受けていることをまず自覚し、一つの見方にとらわれたり、こだわったりすることなく、心を空しくすることを心がけ、できるだけ長く、広く、大きい視野からものごとをながめるように努めるとき、以前には見えなかったものが見えてくる可能性がある。それには、おそらく次のようなものが含まれていると考えられる。

- ① 社会には、自分と同様に多くの人が、それぞれの考えをもつて、それぞれ幸福を求めて生きていること

- ② 従って、他の人々の立場を尊重せずして、自分の真の安心も幸福もないということ
  - ③ また世の中では、多くの人と人、人と物が相互依存と相互扶助のネットワークで限りなく複雑に結ばれており、自分も、そのようなネットワークの中で、多くの存在に支えられていること
  - ④ その認識に基づいて、諸々の存在に対する感謝が自然な気持ちとして生じること
  - ⑤ そのようなネットワークの中で、より広い視野にたつて、全体の調和や建設のために努力することこそ真に価値あることであること
  - ⑥ 自分も他のために何か役に立ちたいという願いが自然な気持ちとして生じること
- 広池千九郎の言葉に「その心大にして天下の人を容る」というのがある。これは、自分の視野を広げていき、究極的には、すべての人々の立場や利害を考慮し、その人々の真の幸福を願うとともに、そのような心を具体的な行動に移すという究極的な境地を表現したものである。自己中心性を克服するために、自分の視野を広げていくとともに、その広がった視野の中に見えてくるものに即して適切な行動をとることによって、自我すなわちエゴイズムと呼ばれていたものは、自ずから解消していくと考えられる。

#### 〈参考文献〉

- |   |                                |
|---|--------------------------------|
| Flavel, J.H. <i>The Developmental Psychology of Jean Piaget</i> , D. Van Nostrand Company, 一九六三 | 科学研究所、昭和五年                     |
| Fletcher, R. <i>Instinct in Man</i> . Schocken Books, New York. 一九六六                            | 広池千九郎『新版道徳科学の論文』広池学園出版部、昭和六一年  |
| 波多野完治編『ピアジェの発達心理学』国土社、昭和四十年   | モラロジー研究所『モラロジー概説』広池学園出版部、昭和五七年 |
| 広池千九郎『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』道徳  | 『ニューモラル二六八号』平成三年十二月、広池学園出版部    |
|   | 『れいろ』平成三年九月号、広池学園出版部           |